



丸山さんが所属していた決六六五部隊第7中隊第1小隊（前列左端が丸山正志さん）

成田 歴史 玉手箱

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。

長野から成田へりんごの定期便

ひとにぎりの親切を忘れず、半世紀続けた恩がえし

太平洋戦争の末期房総半島は本土決戦の戦場として想定され、それに備え全国から召集された通称「決部隊」と呼ばれる兵士が市内各地に駐屯していました。昭和20年の春、久住第二国民学校（現在の久住第二小学校）にも20数名の兵士が駐屯し、その中に、後年りんごの贈り主となった丸山正志さん（長野県小布施町出身）がいました。

丸山さんらは壕づくりのための伐木に連日忙しい日々でしたが、予定の仕事が早く終われば農家の畑仕事や防空壕掘りなどを手伝いました。一方男手がなくなった村では、兵隊さんが来てくれたおかげで村やわたしたちを守ってくれるという安堵感があり、婦人会では芋や野菜などを差し入れし、また歓迎の意味で慰安会を催し、住民と兵隊さんが交互に歌を歌い、楽しいひと時を過ごしました。人々の温かいもてなしは、「故郷のことなど忘れさせてくれたほど心地よい雰囲気だった」と丸山さん自身が戦争体験集に書き残しています。

終戦後帰郷した丸山さんは、成田での出来事を家族に話すと、「りんごを持ってお礼に行ったら」と言われ、同21年8月にりんごを持って再び大室を訪れました。「ここで受けた親切をどのように返したらよいか」と相談したところ、「村の人りに

んごを配るのも大変なことだから、世話になった人たちの子や孫が通っている小学校に贈ってみては」と勧められ、翌22年からりんごの定期便が始まりました。

わずか1カ月の間に村人から受けた親切や優しさ、その後の子どもたちからのお礼の手紙や久住第二小学校の先生方の小布施訪問などは丸山さんを感激させるものでした。これを我が子に対する「生きた道徳教育」だと考えた丸山さんは、家族の理解と協力を得ながら、平成7年9月に亡くなるまでの半世紀もの間りんごを贈り続けました。久住第二小学校の卒業生の中には、親子二代にわたって丸山さんが贈ったりんごを味わった人もいます。悲惨な戦争の中で生まれた心温まる話を語り継ぐために、久住第二小学校には丸山さんとの思い出や交流を綴った2冊のアルバムが残されています。



丸山さんとの思い出が詰まったアルバム



丸山さんから送られたりんごに喜ぶ児童たち

編集後記

夏休みといえば思い出すのがキャンプ。以前、小中学生をキャンプに連れて行き、飯ごう炊さんや、オリエンテーリング、キャンプファイアの指導をしながら自分もいっしょに楽しんだことが何回かありました。天津小湊町のキャンプ場では、雨に降られたり、山蛭に血を吸われたりと散々でしたが、夜には

野生の鹿が出没。子どもたちは驚きの連続に目を輝かせ、自然の中での貴重な体験となりました。ことしの夏休みも残りわずか。市内には坂田ヶ池総合公園の中にキャンプ場があり、デイキャンプも楽しめます。子どもとの夏休みの思い出づくりに利用してみてもどうでしょうか。